



第7回ちきゅうCafé

自然の恵みは「タダ」? ～経済と生物多様性のつながり～

6月30日、阪南大学の千葉知世・准教授を講師に迎え、第7回ちきゅうCaféを開催しました。さまざまな理由で自然環境がどんどん失われている昨今。いったいその理由は何なのか、どうすれば食い止めることができるのか、「経済」という切り口で考えてみようというユニークなちきゅうCaféになりました。

千葉先生からは、まず「愛知目標」の紹介がありました。愛知目標とは、2010年10月に愛知県名古屋市で開催された生物多様性条約第10回締約国会議(CBD-COP10)で採択された、「生物多様性を保全するための戦略計画2011-2020」の中核をなす20の個別目標です。2014年に、戦略計画および愛知目標の達成状況と今後の達成見込みについて分析した中間報告書「地球規模生物多様性概況第4版(GBO4)」が出ましたが、それによると、愛知目標は達成に向けた進捗は見られたものの、生物多様性に対する圧力を軽減し、その継続する減少を防ぐための緊急的で有効な行動がとられない限り、そうした進捗は目標の達成には不十分であると結論づけられたと説明がありました。

生物多様性が損失していく基礎的な考え方として、「市場価格をもたない」、つまり「価格をつけることができない」ものであり、お金を払わなくても見たり聞いたりすることができるという「非排除性」をもち、同時に多数の人が楽しめる「非競合性」をもつ「公共財」としての性質を有しているとの確認があり、さらに「非排除性」があるために販売することが難しく、そのまま放置されるとその存在自体がなくなる可能性が高いと説明がありました。環境には「お金の換算できないもの」が非常に多く、その経済的価値をどう評価して、経済に組み込むか、が課題であると



のことでした。最近よく耳にする「生態系サービス」という言葉は「自然の恵み」、つまり今ある環境から人間が得ているサービスや財(便益)を指しますが、私たちの生命、その安全、健康、社会的絆に深い関わりがあることが分かります。これまで私たちは、そのようなサービスをタダ同然で利用したり扱ったりしてきましたが、その価値を十分に評価・認識してこなかったために、生物多様性の損失や生態系サービスの劣化を招く結果になっているということ、生物多様性の価値を経済的評価により可視化することが有効であるというお話でした。ただし、評価を行うことには限界があるということには留意しなければならないとおっしゃっていました。これは2007年のG8+5環境大臣会合で提唱されたTEEB「生態系と生物多様性の経済学(The Economics of Ecosystem and Biodiversity)」の考え方を紹介されたものです。

今回のちきゅうCaféでは、生物多様性の損失をこれ以上進行させないため環境の価値を経済に組み込むという発想がうまれてきたこと、それをやるにあたっての困難さについても聞くことができました。一度にすべてを理解するのは難しく感じましたが、大変興味深いお話でした。

土田 道代 (CASAスタッフ)